

～アイルランドおよび英国の競馬学校を訪ねて～

軽種馬育成調教センター 技術普及課

小守 智志

はじめに

競馬先進国であるアイルランドおよび英国の競馬学校における教育指導方法の習得と併せ、若馬の馴致技術ならびに調教方法を体得・視察するために、平成20年10月12日から同年11月23日まで、およそ40日間の研修を受けてきました。両国は太平洋の北西部に位置し、温暖なメキシコ湾流と大西洋から吹く偏西風の影響を受けて、気候は安定した海洋性気候であり、夏は涼しく冬は緯度が高いわりに寒くなく、年間の降水量も日本に比べれば少ないようです。

両国では、育成馬および競走馬に携わるきゅう務員・騎手等を育成する人材養成機関、RACE (Racing Academy & Centre of Education) および BRS (The British Racing School) を視察し、両国の代表的なきゅう舎および牧場での馴致技術と調教方法の体得を目的とした研修を受けました。また、競馬の開催、競馬サークルの実態、馬文化等についても視察してきました。

今回は、その中で人材養成機関のアイルランド競馬学校 (RACE) と英国競馬学校 (BRS) の両校の紹介と併せて、両国の馬文化についても若干紹介します。

RACE (アイルランド競馬学校) の概要

RACE では、かつてBTC が教官として3年間招聘していたバリー・ウォルシュ氏とポール・キーティング氏がおおり、元ジョッキーのナイル・バーン氏を加えた男性教官3名によって、およそ30名の研修生の指導にあたっていました。研修期間は6ヵ月で実施され、私が訪問した時は入講して2ヵ月半が過ぎていました。

研修の1日の流れは、教育用馬が42頭であることから、騎乗訓練は午前中の1鞍を基本としたスケジュールとなっていました (表1)。その後は2鞍目の騎乗訓

練班、1鞍目の騎乗訓練風景を撮影したビデオ鑑賞 (騎乗チェック：写真1) およびシミュレーターによる訓練班、たて髪編み方等の実習班の3班に分かれて実施されていました。

6ヵ月間の研修期間での騎乗訓練スケジュールは、最初の1ヵ月間は覆馬場と角馬場にて、基本的な騎乗姿勢を習得させ、2ヵ月目から400mトラックにて、教官の

表1 研修における1日の流れ

時間帯	研修内容
6:30～	朝飼付
7:00～7:30	朝食
8:00～8:45	馬房清掃
9:00～10:30	1鞍目騎乗訓練
11:00～12:30	2鞍目騎乗訓練 ビデオ鑑賞・シミュレーター訓練 その他の実習
13:00～13:50	昼食
14:00～17:00	学科等の受講
17:30～21:00	夕食 自由時間 自主練習



写真1 ビデオ鑑賞によるレクチャー

リードホース併走による走路騎乗へと移行し、3ヵ月目からはカラ調教場を利用した騎乗訓練へ移行されました。その後、研修生の騎乗レベルに応じて4ヵ月目から、カラ調教場近郊でのきゅう舎実習に行かせる研修生と、騎乗レベルが低く実習に行かせられないと判断された研修生は、少人数での1日2～3鞍の騎乗訓練を実施するスタイルがとられていました。

4ヵ月目以降から研修終了までは、牧場実習と騎乗訓練（写真2）の補習授業の繰り返しとなっています。午後の研修は、学科（一般教養・馬取り扱い全般の講義）が行われ、馬の手入れは午前中の騎乗訓練終了時に済まされていました。研修期間内において習得させる実技・講義の項目は決まっていたのですが、週・月単位での研修カリキュラムは特別に決められていませんでした。そのため、実技においては、その日の朝、教官3名によるミーティングにより、その日の天候や馬場コンディション、研修生の騎乗レベル等によって実技内容が決められていました。

BTCでは研修生全員をある一定ラインまでの騎乗レベルにさせることを目的としていますが、RACEは競馬学校として騎手志望者が大半を占めているため、騎乗レベル別にクラス分けされ、上級者は障害飛越訓練・ゲート訓練（写真3）やスピード調教訓練（写真4）を、私が訪問した3ヵ月目で実施されており、各研修生に応じた騎乗訓練が実施されていました。研修生全員に共通して実施されていた騎乗訓練としては、カラ調教場内の起伏を最大限に利用して、不整地での騎乗バランスの確立を目的とした訓練（写真5）を頻繁に取り入れており、

1日1鞍の訓練内容に十分な時間を掛けて取り組んでいました。



写真3 ゲート訓練



写真4 教官併走のスピード調教



写真2 走路での騎乗訓練



写真5 不整地での騎乗訓練

BRS（英国競馬学校）の概要

BRSでは、きゅう務員課程（9週間コース）を視察しました。このコースはNVQ（National Vocational Qualification）といわれる、競走馬に携わる人のための国家資格取得を目的とした研修生が大半を占めており、卒業と同時にNVQの約75%の必須単位を取得できるコースでした。英国においては競馬産業の仕事に限らず、他の職種においてもこの資格は趣がある重要な資格と位置づけられています。

きゅう務員課程は1クラス18名の定員で研修が行われており、ビギナーズクラス（入講から6週間目まで）とアドバンスドクラス（7週間目から卒業まで）に分かれて、カリキュラムが組まれていました。6週間隔で常に新しい研修生が入講してくる方式がとられているため、RACEとは違い、計画的な研修カリキュラムが週単位で作成され、各クラスとも3週間単位で必ず決められた単位を取得させるように、研修が組まれていました。そのため、騎乗および学科においても、毎日のように補習が行われており、短時間で集中的に資格取得の必須単位を取得させようとする教官の努力と、必ず取得しようという研修生の意欲がうかがえました。

教育用馬として繋養している馬は63頭おり、うち60頭が元競走馬、残り3頭がポニーでした（写真6）。10数年前はポニーやハンター種も多く繋養されていたようですが、現在はほとんどがサラブレッド種へと変化していました。その一番の理由としては、無償で馬を仕入れられることがあげられ、さらには実践的なスピード調教訓練にも対応が利くことでした。繋養馬の年齢層は、15歳前後が多く、その中に20歳馬も3頭いました。これはほとんどの馬が、平地競走から障害競走へ転向して数年使用されてからBRSの教育用馬となるため、10歳近くの馬が多くなることでした。教育用馬として、多少歳をとっている馬の方が落ち着いているのと同時に、10歳まで現役を続けられたタフさが教育用馬としても長く続けられると、ある教官は教えてくれました。

騎乗訓練は、7週間の研修期間内で、3週間単位により訓練場所が変更されていました。最初は覆馬場から始まり、次に500m周回走路、最後に1,400m直線走路を主体とした訓練へと移行されていました。研修生が走路で騎乗訓練を行う際は、トランシーバーを装備し、JRA競馬学校に近いスタイルで実施されており、直線走路での

騎乗訓練においては、馬場ラチを挟んで車と騎乗者が併走し、トランシーバーでの指示およびビデオカメラでの撮影が毎回行われていました。講義等の指導方法においては、BTC方式と大きな違いはみられず、実技・実習およびデモンストレーション等（写真7）についても、ほぼ同様に進められていました。

一方、騎乗訓練を撮影したビデオを有効活用する点においては、BRSもRACEも同様であり、BTC方式では取り入れられていない指導方法でした。BRSでは講義としてビデオ鑑賞させながら、教官による各個人への指導と併せ、研修生同士間でも相手の良い点や改善すべき点を発言させていました。このディスカッションにより、良い騎乗フォーム・良い騎乗バランス・良い騎乗テクニックを見抜ける眼も養わせるとともに、自分自身で安定した騎乗姿勢を確立できる能力を養うことも見据えての講義でした。さらに、BRSではシミュレーター室での



写真6 厩舎前の引き運動



写真7 装鞍デモンストレーション

実習も多く実施されており、シミュレーターとバランスボールを用いて（写真8）、騎乗姿勢の確認と騎乗バランスの構築を目的としたレクチャーが少数班に分かれて行われていました。

アイルランド・英国の両学校の騎乗訓練において、最も重点を置いて指導していたことは、やはり優れた騎乗バランスの確立でした。RACEにおいては、不整地での騎乗訓練により、馬の前後左右の動きに対応するよう実践の中で研修生に身に付けさせ、BRSにおいては、バランスボールの上に四つん這いになる練習等と、手綱を持たない状態で腹帯が外されている鞍に跨り、シミュレーターを作動させて行う訓練を毎日繰り返し実施していました。どちらも方法は違うが、研修生へ求めていることは共通しており、今後のBTC方式においても大いに活用していく価値があると感じられました。

日本との馬文化の違い

両国での研修生の騎乗レベルは、小学校低学年からポニークラブ等に通っていた子供や、家庭にプライベートホースを所有し、休日にトレッキングや競技会へ出場していた経験者が多く、馬にほとんど乗ったことが無く、BTCへ入講してくる研修生とは全く異なっていました。

その背景には、アイルランド・英国と日本では馬文化の違いが大きく、日本では乗馬・馬術は特別なスポーツ・娯楽とされている部分が多いが、競馬先進国の両国は、地域全体が馬文化と競馬を楽しみ、さらには「馬」という動物を誰もが理解しているかのように感じられ



写真8 シミュレーター・バランスボールによる訓練

ました。これは私が生まれ育った北海道の別海町で行われている草競馬的な要素も感じられ、「国民的大衆レジャー」としての競馬開催というより、「地域のお祭り」というような雰囲気でした。

また、今回の研修では、馬文化の違いを知るうえで、両国のインターナショナルホースショーの視察（写真9）や、毎週のようにあちこちの市町村で開催されていた乗馬大会への参加も、休日を利用して経験することができたことは、見聞を広めるための貴重な体験でもありました。特に、ホースショーの合間に行われるアトラクションで、各国（アイルランド、北アイルランド、イングランド、スコットランド）のポニークラブ（小学校低学年から中学生）代表者による、乗馬対抗リレーの1コマにおいては、子供たちの騎乗レベルの高さに脱帽するほどの衝撃を受けました（写真10）。



写真9 ホースショーでのアトラクション



写真10 高度の騎乗技術を持った子供達